

人間革命

第三卷

池田大作

聖教新聞社

人 間 革 命

第 三 卷



© 1967

昭和 42 年 3 月 16 日 初版

定価 380 円

著 者 池 田 大 作

発行者 秋 谷 栄 之 助

発行所 東京都新宿区信濃町18 聖教新聞社
電話 東京 (353) 6111

落丁・乱丁本はお
取替えいたします

印刷 明和印刷株式会社
製本 株式会社星共社

Printed in Japan

目

次

あ と が き	道 宣 結 漣 群 渦 新
程 告 実	像 中 生

270	216	172	135	88	51	3
-----	-----	-----	-----	----	----	---

人間革命

第三卷

挿 装

画 画

三 川

芳 端

悌 龍

吉 子

新

生

昭和二十三年元旦。

快晴――。

戸田城聖は、神田の日本正学館の二階で、御本尊の前に端座し、早朝の勤行をしていた。彼の背後には、六、七名の側近の幹部が、耳をときすまし、御本尊をじっと見詰めながら、彼の声に和していた。

勤行の呼吸は、少しの乱れもなく、一人の声のように力強い和音となって響いていく。快かった。戸田は、今日はいいな、と何気なく思った。

この後に、ながい唱題がつづいた。軽やかなリズムはいよいよ潑刺として、一糸乱れず意気軒昂ともいべき響きとなって、彼等の五体をつつんだのである。

戸田は、ふと無数の星雲の渦巻いている、果てしない大宇宙を思いうかべた。その壮大な景観

のなかに、極微に近いわが身の小さな存在が不思議な思いで感じられてならなかった。

彼は、はてな———と思った。

——果てしない大宇宙。ものすごい超高速で運行している星雲の群。その中に銀河系という一〇〇〇億の星の一群団がある。……

この銀河系のなかで、太陽という恒星を中心にして回転している九つの惑星。——そのなかの一つの星にしか過ぎない、この地球。……一瞬の静止もない。すべてが一定の秩序で変転してとどまるところを知らない。過去幾百千万年、そして未来永劫に。

地球は自転しながら、太陽と約一億四九五〇万キロの距離を保つ軌道の上を、毎秒約三〇キロの速度で公転している。この地球のなかの小さい島国の一角で——いま、自分は妙法を心から唱えている。この一人の人間、そもそも戸田城聖という俺は、いったい何者なのであろうか。

彼は、真剣な哲人となって、宇宙の深淵をのぞく思いに沈みながら、自分自身の確固たる存在をたしかめた。

——惑星の中で、太陽に一番近いのは水星で、約五七八七万キロの離れた軌道上を、毎秒四七キロの速度で公転し、八十八日で一回転を終わるといふ。また、太陽から一番遠い、外側の惑星は、冥王星である。太陽を去ること、約五八億七〇〇〇万キロ、毎秒四・六キロの、おそい速度

で約二四八年かかって一回の公転をしているという。水星は、太陽の強烈な放射熱のために、生物の存在は考えられない。冥王星は、あまりにも冷たくて、これまた生物の生存には適しない。地球だけが、不思議にも程よい位置にあって、三百六十五日五時間四十八分四十六秒で一回の公転を終えている。

——これらの厳然たる事実を、つぶさに知ってしまった地球上の一生物、人間の智慧とはなかなか大したものだ。だが、その智慧ある人間が、それぞれ背負っている、抜くことのできない不幸というものに、いつまでも戸惑っているというのは、一体どういうことなのであろう。

不幸というものの実態は、宇宙の神秘さよりも、はるかに神秘的で、厄介なものだからであるうか……。

戸田を導師とした唱題の声は、時間を忘れたように、なおも続いてゆく。その波動は、部屋いっぱいには満ちあふれ、立て付けのわるい部屋から外へ無限に流れるように感じられた。

——地球という、この大宇宙に浮かぶ一個の惑星、その島国の一隅で、俺は今なにをしているのか。みすばらしい部屋、寒い部屋で懸命に唱題している。この戸田城聖という生命は、いったい何をしているというのか。

「ただ俺は魔王との戦いを宣言しているのだ。その自分だけが存在しているのだ」と、彼は自得

していた。

大宇宙のなかで、魔との戦いに挺身している孤独な自分を、しみじみと悟ったのである。彼の五体に活力がみるみる溢れるように湧きあがってくるのを覚えた。その生命の力は、もはや何ものも、遮ぎえることは出来ないに違いない。彼は唱題の力が、宇宙に遍満するであろうことを、当然のように信じられたのである――。

彼はわれに還った。そして最後の題目を三唱して勤行を終えた。にっこりしながら、くると向きをかえ、幹部たちの顔を見た。服装はあまり普段とかかわらず、みすぼらしかったが、上気した顔は、つややかに、うっすらと桜色さえしている。どの眼も生き生きと輝いていた。

「おめでとうございます」

一同は口々に挨拶する。原山幸一が改まってさらに言った。

「先生おめでとうございます。……本年も相変わらず……」

戸田は、笑いながら、

「やア、おめでとう。……ところで、本年も相変わらずじゃ困るなア。そうだろう。去年とおなじことをやっていたんでは、広宣流布は腐ってしまうじゃないか。原山君は去年とおなじよう

に、もそもそ動こうというわけか？」

どっと笑い声があがった。

「三島君がぶつぶつ、小西君がふくれながら、関君が青い思案顔しあんがほというのでは、第一、僕が困るんだよ」

さらに高い笑い声があがった。

「今年は、いよいよ再建さいけん三年目にはいった。諸君は自分の持ち味あじを充分生じゆうかし切きって、強い強い信心しんに立たって、立派りっぱに折伏行せつふくぎやうを全まうして欲ほしい。そういう年にしたい。みんな大いおおに変わかわって貰もらわなくてはならない」

一同の顔から笑いが消えた。戸田は釈然しゃくぜんとして、話す言葉を一言一言くりかえすように言った。

「諸君は、去年も活躍かつやくしたように思っているだろうが、実際じつさいは惰性だせいに流された活動であつたのです。僕が講義をし、僕が座談会に行く。そこだけにしか学会活動はなかつたといつてよい。僕がない所では、なんの活動もなかつた。こんなことでは正法の久住くじゆうは嘘うそになる。觀念かんねんだけだといふことになる。座談会に私がいようが、いまいが、どしどし折伏活動を前進させなくてはならない。私の跡あとをつけまわすだけが信心と思つたら、大間違おおまちがいです。それでは惰性だせいになつてゆく。大

聖人様の仏法をいつのまにか腐らすことになる。本当に怖いことだ」

戸田はここで口を噤んで、次の言葉を探すかのようであった。

まことの指導者は、一人が百歩前進することより、百人を一步前進せしめることを常に考えているものだ。

戸田は淡々と、静かな口調の中に、力強く言葉を吐きつけて言った。

「……だからといって、僕の口真似をし合をやって行け、というのでは決してない。僕がいようが、いまいが、もつと自分自身の信念で、信心で、心から訴えきって行け、といたいのだ。

みんなの話は、強盛な信心で功德を受け、歓喜しているお婆さんなんかの確信に、まだまだ敵わないじゃないか。

組織が秩序立ってくると、どうしても幹部の情性がはじまる。自分では気がつかない。相変わらず結構やっているとと思っている。この相変わらずが、曲者なのだ」

原山幸一は、居たたまれなくなって、口をはさんだ。

「先生、さっきは私の失言です。……本年は、ひとつ大いに相変わりまして、よろしくお願いいたします」

「わかったか。宇宙のあらゆる一切のものは、天体にせよ、一匹の虱にせよ、刻々と変転して行

く。一瞬といえども、そのままでは出来ぬ。相変わらずでいこうと思うのは錯覚にすぎない。そこで、一番の問題は、良く変わっていくか、悪く変わっていくかです。このことに気がないでいる時、人は惰性に流されて行く。つまり、自分がよく変わって行きつつあるか、悪く変わって行きつつあるか、さっぱり気がつかず平気である。これが惰性の怖さです。

信仰が、惰性に陥った時、それはまさしく退転である。信心は、急速に、そして良く変わって行くための実践活動です。

あらゆるものを、刻々に変転させて行く力、それを生命といい、如々として来る——つまり、この力を如来といい、仏と名づけるのです。

この力を大聖人様は、さらに南無妙法蓮華經とおっしゃった。そして、それを具体的に、十界互具の御本尊様としてお遺しになった。この一切の根本を度外視して、われわれの信心はない。……宇宙自体にも、われわれ一人一人の小さい人間にも、すごい生命の力、南無妙法蓮華經があるのです。

この信心をして、それが自覚できないということは、謗法です。機械にモーターを掛けていないのと同じだ。音楽家が、ピアノの前に坐ったきりで、キーをたたかないのに等しい。

諸君が、こんな調子で、信心をやっていけばいいなどと考えていたら、なんの意味もない。

また、今の不幸が、生涯しやうがいつづくように思えても、それは変わっていく。信心しんしている限り、必ず幸福へと変わって行く。それが自然しぜんの理ことわりであり、宿命しゅくめい転換てんかんということだ。

また、今の幸福が、永久につづくように見えても、この根本の信心がない限り、いつ不幸な方向へと、変転へんてんしてしまうかわからない。……国だって同じだ。いま、日本の国は他国に占領せんりょうされて、どうにもならない不幸に陥おちっている。いったい何時いつまた幸福が到来とらいするだろうか、とみんな絶望ぜつぼうしているが、私は決して絶望などしていない」

正確な史観しかんと哲理てつりと実践じっせんをもった指導者の前途ぜんだには、春光しゅんこうが輝く。

寒い部屋へやに、新年の曙光しやうこうが、輝きはじめている。ようやく外の通りに人の動く気配けいがでてきた。

「仏法の真髓しんずいに照てらして、いつまでもこんな状態であるはずがない。まして広宣流布の第一歩が踏み出されたところだ。この達成に近づけば近づくほど、いまの状態から早く脱却だつぎやくできる。

一国の広宣流布ということは、要するにその国の宿命しゅくめい転換てんかんを、完全に遂行すいこうするということだ。人類史上じんるいじしやう、誰もやったものはないのだ。今まで、どんな優れた思想・哲学・宗教でも、一人一人を完全に救うことも出来できなかった。せいぜい気休めきやすめの慰めなぐさくらいのことしかできなかった。まして、どんな立派りっぱそうに見える主義・主張しゅぎ・しゅちやうも、一国をまるまる見事に救ったことはない。

そのくせ、いつも飽きもしないで、人々は理想社会を夢見つづけて来た。それというのも、いつの時代も不幸であったといえるのではなからうか。

こうした誰にも出来なかったことが、必ず出来る、私はいうのだ。何故かならば、日蓮大聖人が絶対の保証をなされている。不肖の弟子、戸田の知り得た限り、大聖人のお言葉が狂ったこととはない。それは一切の真理の根本をあやまたず、お説きになっているからだ。

万人が万人、理想としていること、しかも誰一人やろうとしても出来なかったこと、そして誰も信じなくなってしまうことを、いまわれわれの手で成就しようというのだ。

人類にとって、これ以上の最大最高の偉業はない。難事中の難事だ。しかし、必ず出来る。われわれに力があるからだなどと言惚れてはいけない。大聖人様の仏法には、それだけの物凄い力があるからだ。

それを勉強し、実践するわれわれが、いい加減な覚悟で情性に沈んでいるとしたら、大怪我のもとだ。仏法は厳しい。厳しいが故に、私は諸君にそれを言っておかねばならない。

本年も相変わらず……というところから、とんだ長い話になってしまったが、諸君の何気ない一言でも、それを言う時の諸君の心の実相というものが、僕には解りすぎる位わかる。それが信心というものだ。生命とは、形も色もないものだが、そのような実相の上に厳然と現われてくる

ものだ。言葉尻を捉えたなどとケチなことを考えては困る。真相はまさしく諸法であり、諸法はまさしく真相だ」

彼の気魄は、弟子たちの胸をゆすった。部屋は緊張に包まれている。彼等の眼は、戸田を凝視して冴えていた。

茶褐色の畳、煤けた壁、汚点のついた天井、その中を白金の閃きともいべき光芒が、戸田の顔から放たれているように思われた。

厳しい。純粹である。それでいて、底しれず暖かった。

「正月元旦から、やかましい話になってしまったが、今年はやかましい年だと思って貰いたい。

いよいよ諸君を徹底的に訓練しなければならぬ時がきているのです。これも時だ。この時も知らずに、うるさいことばかり言うといって、不平をいつてはなりませんぞ。戸田が君たちを憎んで何になる。私は諸君たちの一生のことを、それぞれ、ちゃんと考えているのです。とんでもない心得違いをしてはいけない」

訓練なくして、偉大な人生を歩んだ人は一人もない。芸術も、技術も、事業も、政治も、そして革命も——。

戸田は、言うべきことを言い尽くしたと思った。身を堅くして聞きいつている弟子たちが、た